

『明暹流羯鼓譜』解題、附翻刻

根本 千聡

1. 書誌情報

宮内庁書陵部蔵（伏見宮家旧蔵、函架番号…伏・一五三〇）。冊子本。縦二二×横一五五ミリ。十五丁。仮綴。ところどころ虫損があるが書陵部において補修済。

外題には「明暹流羯鼓譜」、内題には「羯鼓譜 明暹流」とあり、書陵部では「羯鼓譜（明暹流）」として登録されている。表紙外題下には「頼盛之」とあるが、これは奥書から書写者、あるいは元の所持者の名であることがわかる。また、表紙上部中央には朱で「丁」（笛の指孔名か）とあるが、この意図は不明。

奥書によれば、貞和四年（一二四八）の六月から七月にかけて、「印春」から「頼盛宗禪房」へ伝授された楽譜であるという。この両名間の授受関係は、上野学園大学日本音楽史研究所蔵『新撰要記抄』奥書にも同様の経緯が記載されており、この時期、両名の密な親交のあったことをうかがわせる。また、どちらも同じ打物に関連する楽譜・楽書であり、本資料は明暹流、『新撰要記抄』は狛流であるという点も、打物の相承系譜を探るうえで重要になってこよう。

なお、書陵部における本資料に対しての見解（資料整理カード）は、新型コロナウイルス感染対策のため閲覧の許可が下りなかった。

2. 明暹と演奏伝承

本資料の奏法の祖となつたとされる「明暹」なる人物は、従来の音楽史研究においても知られている。すでに磯水絵氏による詳細な専論があるため、詳しくはそちらを参照していただくとして、ここでは簡単に確認しておく留めたい。

『尊卑分脈』、『大家笛血脈』によれば、明暹は藤原式家明衡（？～一〇六六）の子とされる。『三会定一記』承徳元年（一〇九七）条には「明暹卅九」保安元年（一一二〇）条には「講師明暹（六十二）」とあるから、逆算すると一〇五九年の生まれであり、明衡晩年の子であったことになるが、父子の年齢差から考えて養子ではないかとみる向きもある。その後、経緯は不明ながら、興福寺に属する僧侶となつてることが諸資料からわかる。

父明衡は『新猿楽記』の著者であると比定されている。また、弟の敦光（一〇六三～一一四四）は、藤原宗輔撰『管絃譜』序文の草文を作成しているが、いずれも音楽に堪能であったことを直接に示すものではない。かろうじて、音楽芸能に対して関心をもった家系であったとはいえようか。いずれにせよ、明暹が本格的に楽の道に目覚めたのは興福寺との縁をもってからとみられ、師の円憲や、後述する玉手氏や狛氏といった南都の楽人たちとの交流に端を発したものではないかと推察される。

住居でもあった「浄名院（浄明院）」は明暹の別称としても用いられるこ

とがある。同院は興福寺に存在していた子院である。明暹の音楽の師であった円憲も同じく「浄名院」と称されることがあるが、一部に両者を取り違えた説話が伝わっていることを鑑みると、これは両者を混同した後人による勘違いの可能性もあるうか。なお、伏見宮家には『浄名院流琵琶説秘譜』（宮内庁書陵部蔵、函架番号・伏・一〇九〇）という琵琶譜が伝わるが、この楽譜と明暹・円憲がどのようににかかわり得るのかはわかっていない。

『三五要録』などによれば、明暹は笛譜も編んでいたという。この笛譜については山井家蔵の『新撰竜吟抄要録』高麗曲部分がその一部ではないかとみられているが、同譜は現在公開されておらず、わずかに平出久雄氏による調査記録が残るに留まる。いわく、「本撰譜者ガ―明暹。奥書ノ筆写ナルモ記名ナシ―当代天下無双ノ高麗笛師玉手友行七男兵庫允玉手公頼―公頼ノ伝承ニ関スル詳文アリ―及子息公光・公延ニ従ツテ円憲ト共ニ笛曲ヲ習樂シ、然ル上公光・公延・円憲ト奥書ノ筆写（明暹）ニテ高麗笛譜ヲ共撰シ、更ニ伯則近ニ楽説ヲ問ヒテ、異論濫吹ノ現在ノ楽界ノ定譜ヲ作ル由ノ事情ヲ述ブ。」⁽²⁾とあって、同譜は玉手公光、同公延、円憲らとともに、笛譜の正本として編まれたものであったらしい。玉手氏は薬師寺を本拠とした楽人であって、明暹の、南都楽人たちとの交流がうかがわれる。明暹とともに鞀鼓演奏伝承の重要人物として仰がれる伯行高も興福寺に属した南都楽人であるから、このあたりが打物伝承の発生圏となっていたのではないかと考えられる。

3. 書写者「頼盛」と「印春」について

書写者の宗禪房頼盛について伝える資料はごくわずかながら、判明することとは意外に多い。『斑鳩嘉元記』（『大日本史料』所収）には次のように伝えられる。

一当時聖霊会三鼓事。延文二年^{西丁}六月日、新造之。作者頼盛^{宗禪房生五十五、六日安住人}、薬師寺黒筒造写。筒桐木者。慶祐大法師進之。料足ハ以慶玄法印御舍利供養之内、一臈実禅僧都沙汰之。抑薬師寺三鼓黒筒破損之間張替之。作者頼盛、延文元年^{中丙}四月廿六日ヨリ七箇日之間、精進結齋シテ其功畢^{歳生年五十五、宗禪房}。先度張作者ハ、奈良ノ水門是正ト云寺侍張云々。百廿年ニテ張替之云々。以此次黒筒ノ寸法造様ヲ見写テ、少モ不替新造之。如法重宝也。

（句読点は筆者）

延文二年（一三五七）の時点で五六歳であるから、逆算して一三〇二年の生まれということになる。居住した「目安」は、法隆寺の南方に位置する現在の目安（奈良県生駒郡斑鳩町）と同じ地であろう。本記事に伝えられている、薬師寺の鼓を模して造られたというこの三鼓は、〈黒漆鼓胴〉として現物が東京国立博物館に伝存している。胴内の墨書には次のように記されている。⁽³⁾

法隆寺聖霊会料三鼓也。薬師寺黒筒写。願主一臈胴内稚少僧都実禅 権律師慶祐。作者筆築吹寺僧 頼盛宗禪房年五十六 目安住。

（句読点は筆者）

頼盛は法隆寺の寺僧で筆築吹であった。さらに、聖霊会に用いる鼓胴の作製まで任されるというのは多才な人物であったようだが、ともあれ、音楽、とりわけ打物については周囲からも信用が置かれていたことがうかがえる。これに先立つ『明暹流鞀鼓譜』の伝受と書写も、こうした人物的背景に起因したものであったと推察されよう。

一方、伝授者の印春について伝える資料は管見に及ばない。ただし、前述したように、南都打物の伝承書である『新撰要記抄』についても、本資料と同様、印春と頼盛との授受関係が認められる。この『新撰要記抄』の奥書に

は「此書者印円深観房集秘書所被撰出也」とあって、深観房印円によって編まれたものであるというから、印春はその弟子筋にあたる人物であろうか。印円の師である順良房聖宣は興福寺僧で、『教訓抄』を編んだ伯近真の後援者と目されている。^④すると印春も興福寺楽人の関係者であった蓋然性が高い。そうであれば、明暹にまつわる資料が伝えられていたことにも合点がゆく。

4. 本書の資料的価値と鞆鼓演奏伝承の系譜について

明暹流の鞆鼓演奏伝承については、伯近真『教訓抄』をはじめとして、多くの打物関係楽書・楽譜に引載されている。とりわけ、伯行高流の奏法と併せて載せられていることが多く、平安末期以降、両流が鞆鼓奏法の礎となっていたらしいことがうかがわれる。本資料の原拠は不明ながら、明暹の演奏伝承を直接に伝えている可能性もあり、院政期における打物伝承を考察するうえで意義深い資料であるといえる。

明暹・行高の二つの流派のうち、伯行高の流れは近真ら南都伯氏に受け継がれたと考えられるが、では明暹流はというと、奥書には、「仁和寺木工権守孝道、披見鞆鼓譜ヲ、散明暹流不審訖。所詮、明暹流鞆鼓者仁和寺孝道方習留之歟」とあって、藤原孝道（一一六六～一二三七）がその流れを受け継いだと考えられていたらしい。しかし、明暹と孝道とでは活躍の時期が一世紀ほどずれており、当然、両者の生没年は重ならない。孝道がどの程度明暹流の奏法をふまえていたかは疑問である。ただし、孝道は先述した興福寺僧聖宣を甥にもっており、その関係から明暹流の鞆鼓奏法、あるいはその関連資料を知る機会には十分にあったと思われる。ただ、聖宣との関係を考えるのであれば伯近真も同様であるため、やはり、孝道が特別に明暹流を継いでいるとするのは根拠に乏しいだろう。

一方で、先の記載に続いて奥書に「管絃方殊以可賞翫流也」とある点は注

目に値する。すなわち、明暹から続く（と考えられている）孝道の系譜は「管絃方」、つまり堂上の奏法であるとみなされていたらしく、そうであれば、一方の行高流はさしずめ、地下方の奏法とでもいえるようなものであったと考えられよう。伯氏の打物伝承の流れはもとより、孝道の流れも、孝道撰『知国秘抄』や、孝道の嫡男孝時撰『法深本打物譜』、孝時の曾孫孝重撰『擊鼓抄』^⑥などから追うことができるため、このあたりの資料を精査することで、院政期から中世にかけての打物演奏伝承の変遷と、それがどのようにに現行伝承へと繋がり得るのかを解明することが可能なのではないかと期待される。

注

- 1 磯水絵「二〇〇三」『院政期音楽説話の研究』（和泉書院、二〇一六）『説話と横笛』（勉誠出版）など。
- 2 平出久雄「一九五二」「山井景昭氏雅楽蔵書目録（中）」（『東洋音楽研究』一〇、一一号）より。
- 3 国宝〈黒漆鼓胴〉解説文より（https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webView=content_base_id=100686&content_part_id=000&content_pict_id=0 二〇一四年二月二〇日確認済）。
- 4 神田邦彦「二〇一七」『中世楽書の基礎的研究』（和泉書院）より。
- 5 本資料中に「仁和寺入道法名権藤藤原孝道去建保之比、依佐渡院之宣二、草進之本。但鞆鼓許被注之」とある点を奥書とともに鑑みると、本資料は藤原孝道によって編まれたものである可能性も考えられる。後考を俟ちたい。
- 6 『法深本打物譜』（伏見宮旧蔵宮内庁書陵部蔵、函架番号：伏・一〇六八）。『擊鼓抄』（伏見宮旧蔵宮内庁書陵部蔵、函架番号：伏・一一〇二）。

凡例

- ・丁の区切りはゴシック体の鈎括弧（）で示した。
- ・割注での表記が難しい場合は、該当本文を□で括って示した。その際、改行部分はスラッシュ（／）で示した。
- ・朱筆部分は網掛けで示した。
- ・読点（、）は、資料中では左側に寄せて記されている。
- ・雁点（レ点）は、資料中では中央に寄せて記されている。
- ・楽譜部分は画像を貼付して示した。
- ・判読が困難な字は「■」で示した。
- ・その他、特記事項は翻刻文下にゴシック体で表示した。

なお、本資料はオンラインでも公開されている。適宜参照されたい。
(<https://shoryobu.kunachio.go.jp/Toshoryo/Detail/1000703290000>)

（表紙）

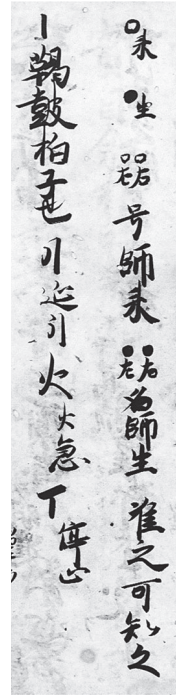
明暹流 鞆鼓譜 頼盛之

（本文）

○鞆鼓譜 ●明暹流

●先案譜法云

○来 ●生 ○○号師来 ●名師生 准之可知之
―鞆鼓拍子也 引 延引 火 火急 丁 停止



凡向鞆鼓之時先見両拔撰^{ツヨキ}、為右、
躍^{ヲトル}拔^ヲ名来^ト、不^レ躍^ヲ拔^ヲ為^ス生^セ、●取拔之法
下余^{シモ}一寸^メ、擎^ル之^ヲ、生拔強弱依機嫌^ニ、来拔^ノ
躍^ル程随楽^ニ、開^ク拔^ノ崎事五寸或六寸^{明暹流}
或八寸^{行高}●打生^ヲ、之時延頭指^ヲ、明暹^{不延者}●
打生之時去^ルハ来拔^ヲ、行高流^雖打^ト生拔^ヲ、不^ル
去^ケ来^ノ拔^ヲ、明暹^於左来^{、者}不断^ニ令躍^之、生^ノ拔^ハ
聊^{ツヨク}勁^来ノ拔^ハ久躍^ル音色堅^{ネイロ}円^{マロ}而有給^キ
響^キ、令^ヨ不^サ聞皮^ノ音^ヲ、以^之之^ヲ、為^吉ト、又欲^タ令^ク三^ニ急^{セカシ}
楽^ノ程^ヲ、勁^打之^{、欲}令^ト緩^{ナラ}楽^ノ程^ヲ、弱^打之^{、此}等故
実自余打物并絃管等皆准之可知
之大方於鞆鼓者雖^{トモ}其詞、以八声、為
本所謂

●阿礼声^{アレシヤウ 同短声} ●大葛声^{タイカツセイ} ●小葛声^{セウカツセイ} ●織锦声^{シヨウキムセイ}

●泉浪聲セムラウセイ ●鐺聲タウセイ ●砂聲サセイ ●塩聲エンセイ 等也

且見于諸道之記抑以声々ノ字ノ仮名等就当流明通注之行高流以声隆有之

始自打様、大旨相替歟阿札声アレイザシ云々自余

背声セイ云々准之歟但於当流者阿札声

有子細歟限ル此声ニ、又白水浪云々此者文字

之誤アヤマリ泉之一字ヲ二字ニ読成歟仍又声、

字無之、行高方之名目也此等ラ差異可

有存知、事也 已上相伝鞆鼓譜者

●仁和寺入道法名智親後原孝道房去建保之比依

●佐渡院之宣ニ、草進之本、但鞆鼓許被注

之、●先師禪門〔右馬助藤孝時／法名智西法深房〕●依今出川相国

禪門公経命草進之打物譜等寄合之

撰出之事也

●音取

先笙次出調子次篳篥次笛音取終程仁

可打之号阿札声之最初師来之後下行来先立

左来明通



如此初ハ勁後ツヨク細ホソ末細ホソ打成テ打止ノ右生極テ

細少打重閑ニ答左来、可打止之、打終後ナカラ

持右拔ヲ、以左手ヲ、張合鞆鼓於甲音ニ、●若甲音

難張合、者可張合乙音ニ、云々●但中院内大臣雅定

說云甲乙沙汰無其詮、只拔ト与皮ト、相応スル之程

張合之條可宜歟云々大方張合鞆鼓事音

〔阿札声〕〔大葛声〕〔小葛声〕〔織錦声〕
〔泉浪声〕〔鐺声〕〔砂声〕〔塩声〕に声点。

〔阿札声〕に声点。

最初の〔声〕に声点。

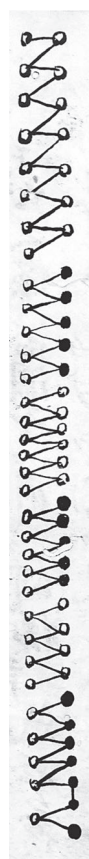
取之後可張、之由雖有之、●口伝云 笙調子

吹出之後笛調子以前無キ何ト、様ニテ張儲之後

打音取ヲ、上少スコシノ事ヲ任テ本式ニ、張合之舛無相

違、不如此、而打之時其音可聞惡故云々

●調子



吹出笛調子後自第三句、可打始阿札短声已上調

子之間打生来生マシヘ交マシヘ搔上事ハカリ兩三度許搔上

可宜歟●但於盤涉調々子者少シ長之間三度許搔

上之条可然乎是師口也マ云々●凡来生共無定数、

●但来ハ多久生ハ少短調子止時如音取生拔ヲ細ニ

二打重テ答来ヲ●閑ニ打止生拔ヲ、明通●行高ハ調子

不終程ハ不打生拔將欲終ト、之時打ト生拔、云々

●序

新樂鞆鼓吹出笛之後
自第一句可打阿札声



生拔打合太鼓之時以前二重打事如此但行高ハ

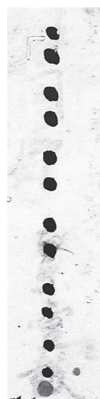
不然 如此打云々右口伝如此然而近來此等



口伝存分ル人ノ類ヒ希先歟能々此等差異存別ワケテ可

取向、哉

●同序 古樂壹鼓可打始事新樂同



隨大鼓臨近付頼打等之、
烏胡然酒并舞奏等打之、

●延八拍子
新樂 鞆鼓



大鼓雖加々々々、鞆鼓者不可打替之、
延八拍子通如此

●又說



号攝和之 合奏詞、時々打之
頗秘之、世人云卷手之常、不可打之

凡八拍子物、生二四拍子物大鼓 以前生一也然而大概是
万秋樂破散手破等初三当喜春樂破皇广破等
初七当是生二反

●同八拍子
古樂 壹鼓



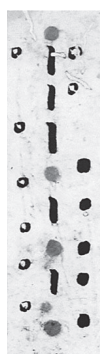
已上壹鼓搔樣如此古樂延八拍子時可用之、陵王破ハ

雖為早樂振舞同用此大鼓雖加々々、於壹者不可替之、

●早八拍子
新樂 鞆鼓



已上此打



加三度々々時用之常說也



●同早八拍子
古樂 壹鼓
烏急執物用之

又說同上三度々々時用之為珍說、



●同八拍子 只拍子
新樂

大鼓雖加々々、壹鼓者不可替之

常說 大鼓雖加々々、鞆鼓不可替之但

大鼓加々々、之後鞆鼓ハ行拔ニテ

有打事

大方只々々々時下來事為秘說、故初兩三々々打後不下來、
竹ノ節ニ可打之、云々

●又說 秘之



●同八拍子 只拍子
古樂 壹鼓



〔於此說者随分秘說也
タヤスク
輒不可用之〕

雖加大鼓々々、壹鼓
不可替之、

●七拍子 有蘇合三帖



又說



已上兩說如次可打
替之

●六拍子 皇帝破
春鶯囀入破



又說



●万秋樂六帖等用之、

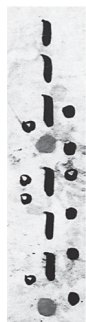
●五拍子 有皇帝三帖



又說



●延四拍子 甘州 蘇合破急 太平樂急等用之、



常已說上

又說



〔号泉浪声、合樂詞、／轉之時々可打之／殊為秘說云々〕

割注は前行末に三行。

●同揚拍子 大鼓雖有二度々々打事、
於轉鼓者可打少葛声也



〔大鼓引拔^ニ合^天／下合師末、号少葛声〕

●同只拍子 甘州等



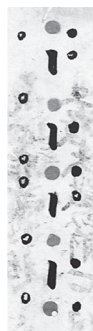
已上 新樂鞀鼓

●同古樂 壹鼓



倍盧 拔頭 輪鼓禪脫等用之

●早四拍子 鞀鼓不違延四拍子、



如此大鼓上一拍子之時
鞀鼓用之

凡四拍子物初々々三当^ル仍鞀鼓者自第二々々、打始
生拔大鼓以前一也但是大概也甘州四^ニ当^ル三臺急五^ニ
当^ル

●蘇合序一帖

初二拍子^{序吹}成樂拍子之時鞀鼓拍子五大鼓六当^ニ
之、

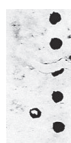


一說



一說也此後樂々々、

鞀鼓打大葛声、々々々者如常八々々、打之、但拍子
不定或十二或十六十八廿四如此大鼓壺不定之
同師来三之後至大鼓壺、



如此打之号大

葛声或說^{ニハ}十二所^{ハ八々々一十六所}八々々二十八所^{ニハ}

八々々一六々々一廿四所^{ニハ}八拍子三如此打合之、但不常、大葛

声者此新也仍用大葛声之條可宜凡末序吹之

時阿礼声可打之、

●同三帖第四第五<sup>拍子間鞀鼓号鐵聲世人云
亂拍子又名詞打之</sup>



一說



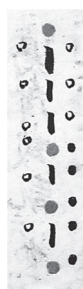
一說
二流常用之
二拍度如次用之

●又說



此一流二拍
度可打替之

●同籠拍子■所



已上号砂声、
■明流說為秘說
不可打之



行高流用之号
世人云調拔之



已上中院流用之号小葛声、

已上三說之内初砂声雖為当流之說、為秘說

故世人存歟隨分之秘說也仍不可打之、凡以說

拍子二所之内初^ハ調拔後^ニ小葛声兩度替用

之、條可宜歟四帖准之、大方有四帖時者以說拍

子三帖^ニ不打而打四帖一^ノ習也而於舞家者竹^ヲ

二^ニ破^{タル}如^ニ三四兩帖可打之、^{云々}又只拍子之時^ハ第

四五兩拍子之所^ニ可用壹鼓、大鼓如蘇莫者破、

可^後插^{三度}之拍子^初口^二一反同最後極秘說也伯氏^ハ第四五許如

此第九十^ハ必常同破急連之時鞆鼓同打連之

而行高流^ニ破終打止自急初、又打始之、輪臺青

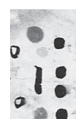
海波連不連次第同之、

同急大鼓最末第廿拍子^ニ打引拔^ヲ、之時鞆鼓打少

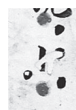
葛声、常習之、以之当流常用之、但於件拍子

者種々秘說在之、又急頻拍子所^ニ以前拍子打調

拔、為大鼓用心也件所二拍子



是常說



又說



又說



等也

下ナル說ヲ上^{ヘシ}

春鶯囀自鳥声移急声、之時合拍子打之說

秘說也近代無知人歟云々明暹流^ニ為規櫛之習^ト、行

高流^ニ鳥声最末拍子打之後^ハ捨拔不打之、急

声吹出後初^テ打之此等兩流不同之隨一也



如此可打之

鳥声終大コ



兩說之内以此說為秘事■不可打之

已上兩流明暹打連說々如此

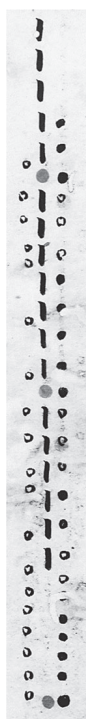
●五常樂詠鞆鼓



已上■序吹然而鞆鼓^ハ四拍子詞^ヲ

可打終之如此二度八々々^ヲ四々々^ニ

別打以之、為習歟以下度打阿札声



凡鞞鼓中古之上手者出雲已講明暹南都淨名院住

左近將監伯行高也然行高方鞞鼓者伯氏等

是等佐大體也

此流則近真受彼真說教訓抄等彼正流也

於明暹流者行高譜中明暹已講被打樣適

云載之雖然為上代事之間真說雖弁之処

仁和寺木工權守孝道披見鞞鼓譜ヲ、散明暹流

不審訖所詮明暹流鞞鼓者仁和寺孝道方習

留之、歟管絃方殊以可賞翫流也

貞和四年戊子六月四日

於此鞞鼓者雖為隨分之秘譜賴盛

宗禪房多年無内外申承之上當時

数奇越時輩秀衆人之間奉授

此秘書訖能々可被秘藏者也穴

賢不可被外見之状如件

貞和二々年七月七日

印春

